

The Blithedale Romance

——Zenobiaへの愛の告白

中 嶋 寿 子

物語の語り手であり、主要人物の一人でもある Miles Coverdale は、Blithedaleでの共同生活を回想しながら、当時の出来事や心情を綴っているが、“The reader must not take my own word for it” (III, 247) には、他人に知られたくない事柄について、ありのままに伝えず、読者を欺こうとする意図も汲み取れる。そのため、彼の心の奥深くに潜む「真実」を、その語りだけから読み取ることは難しいと思われる。

Coverdale は、Zenobia、Priscilla、そして Hollingsworth の三人の複雑な人間関係を、まるで彼の心の “mental stage” の “actors” (III, 156) によって具現化されたもののように述べているが、彼の屈折した精神状態を考えれば、そのバックステージには、彼自身も意識していない真実も存在すると考えられる。

他人の生活を盗み見する傾向のある人間には、“diseased action of the heart” (III, 69) が認められると考えていた Coverdale は、自らも心に何がしかの悩みを抱え、執拗に他人の生活を観察していることから、健全な精神状態を保つことが困難であったようである。満たされることのない欲望を無意識下に抑圧していたために、Zenobia らの生活や人間関係を盗み見することで、そのような欲望を満たしていたと思われる。例えば、“So there [Coverdale’s hermitage] I used to sit, owl-like, yet not without liberal and hospitable thoughts.” (III, 99) や、“Dreams had tormented me [Coverdale], throughout the night.” (III, 153) と、彼には日常的に現実から逃れ、空想に耽ったり、実際に夢を見たりすること

によって、精神状態を安定させようとしていたことが認められる。夢や白日夢は、「願望充足」(フロイト『著作集 二』405)としての機能があり、「空想による願望充足に時を費やしていれば、それが現実でないということははっきりわかっている、ある満足をうることができる」(フロイト『著作集 一』307)とも指摘されている。このように、現実では実現不可能だと思われるような願望を抱き、それを心の中で満たそうと、空想や白日夢に耽ったり、夢を見たりしていた Coverdale は、“Had I made a record of that night’s half-waking dreams, it is my belief that it would have anticipated several of the chief incidents of this narrative, including a dim shadow of its catastrophe.” (III, 38) と述べているように、彼の “half-waking dreams” の状態にあっては、彼の語りに曖昧で意味深な内容が含まれていることが示唆されており、ここには Zenobia の死の真相も隠されていると考えられる。

Coverdale の “half-waking dreams” や、ぼんやりとした意識状態は、Blithedale から離れた場所にある、ボストンのホテルや、森の中にある “Coverdale’s Hermitage” (III, 98) へ行く際に認められる。彼は、Blithedale という日常生活場所から離れ、森の中へと向かう理由について、“Unless renewed by a yet farther withdrawal towards the inner circle of self-communion, I [Coverdale] lost the better part of my individuality.” (III, 89) と述べている。森の奥深くへと進み、物思いに耽ることで、通常は認識することのない感情や願望が思い出され、日常では抑圧せざるを得なかった本来の自分を取り戻しているように思われる。そして、森の奥へと進んでゆく Coverdale は、“my heart full of a drowsy pleasure” (III, 89) と、何か楽しいことを空想して、心を満たしているようである。そのため、“his [Coverdale’s] hermitage, which symbolizes withdrawal within himself” (Griffith 18) という指摘もあるように、現実世界から離れた森の奥深くにおいては、無意識下に抑圧された心理が表出していると思われる。

このような森の奥深くで現実を認識していないような状態の Coverdale は、Westervelt と出会う。この出会いについては、“So much was I [Coverdale]

absorbed in my reflections—or rather, in my mood, the substance of which was as yet too shapeless to be called thought . . . a figure [Westervelt] passed me by, almost without impressing either the sound or sight upon my consciousness.” (III, 90) と表わされている。Westerveltは、Coverdaleが空想に耽っている時に現れることから、現実には存在しない人物であるとも解釈できそうである。Taylor Stoehrが、“Westervelt may be viewed as a sort of Doppelganger for Coverdale, both real and imaginary” (Stoehr 167) と指摘しているが、Coverdaleが無意識に抱いている願望や心の一部が、Westerveltという人物に反映されているとも考えられる。

Westerveltが、Coverdaleの“alter ego” (Stoehr 176) であるならば、夢を見たり、白日夢に耽ったりするCoverdaleの「心の真実」が、Westerveltを通して描き出されているとも考えられる。Westerveltは、催眠術師としての顔を持ち、他人の心を意のままに操ることができる人物として描かれている。Coverdaleがぼんやりとした意識状態で“it was through his [Westervelt’s] eyes, more than my [Coverdale’s] own, that I was looking at Hollingsworth” (III, 101) と思い描いているところから、Coverdaleが、催眠術師のWesterveltを通して、己の本来の姿を隠し、現実では実現不可能な願望を満たそうとしているとも考えられる。そのため、Coverdaleは、Westerveltに自分の姿を重ね合わせることで、他人の心の中を覗き込み、意のままにその心を操りたいという「許されざる罪」にも等しい願望を、彼の“mental stage”の“actors”で、実現しようとしているように思われる。

そもそもCoverdaleは、より良い生活を求めてBlithedaleへやってきたのだが、自分とは正反対の逞しく博愛精神に満ち溢れたHollingsworthと出会い、自尊心を挫かれ、体調を崩す。さらに、心身共に疲労していた自分のことを献身的に看病してくれる彼の姿を見て、“Methought there could not be two such men alive, as Hollingsworth.” (III, 42) や、“there was a tenderness in his [Hollingsworth’s] voice, eyes, mouth, in his gesture, and in every indescribable manifestation, which few men could resist, and no woman”

(III, 28) と、男性としての Hollingsworth の魅力に惹かれ、劣等感や嫉妬心を感じるようになっていた。従って、Coverdale は、Hollingsworth との比較によって、現実のさえない自分を再認識し、劣等感を増幅させていったと考えられる。そして、それが引き金となって、Westervelt を通して、こうありたいと願う自分の姿を想像し現実逃避をしながら、「許されざる罪」をも犯しかねない精神状態にまで陥ってしまったと考えられる。

オーストリア出身の心理学者、アルフレッド・アドラーによると、「何らかの仕方で我々はみな、他者より劣っていると感じたり、自分たちがそうありたいと思うものより劣っていると感じる」ことがあり、「自分がそうあるべきである、あるいはそうであるにちがいないと思うこととの間のくい違いが、我々を劣等感に導く」(マナスター 156) のだという。つまり、Hollingsworth の存在によって、自らがそうありたいと願う姿と現実の自分の姿とのギャップを明白に実感した Coverdale は、今より優れた存在でありたいという焦りにも似た願望を強く抱くようになり、その語りも信憑性が疑われる部分があると考えられる。

したがって、本論では、Coverdale の心の奥深くに根付いている劣等感と、それによって明らかにできない Zenobia への愛の告白が、物語全体を通して暗示されていることを述べたいと思う。Coverdale は、詩人として人並み以上に、自分の語りにもプライドを持っていたと思われるが、精神的な弱さや Hollingsworth への嫉妬心やライバル意識から、自分が思い描く理想の生活を送ることができず、現実逃避を繰り返す。そのような歪んだ虚構の世界の中で、いかにして Zenobia に対する思いを表現し、カタルシスを得るに至ったのかについて論じてゆきたい。

1. Coverdale にとっての Zenobia の死

Zenobia の死因を自殺だと主張する Coverdale の言葉も、全てが信用できる訳ではない。Zenobia の自殺については、“What on earth should the young woman do that for?” (III, 230) と、Silas Foster が疑問を投げかけているように、一般的に彼女は自殺をするような女性ではないとみられている。また、死因が自

殺だと断定しているのが Coverdale だけであることから、彼女の死には、彼のみが知りうる事実があり、彼が何らかの形で関与しているのではないかという指摘もある。¹しかし、Zenobia に対して悪意や殺意を抱く人物がいたとは考え難いことや、Zenobia が、失恋をしたという理由だけで自殺をするような女性ではないことを考え合わせると、彼女の死には、語られていない部分があると推察される。そのため、Zenobia が自殺をしたと主張する Coverdale は、その原因や背景について心当たりがあるが、そのことを受け入れ難いために、失恋の末に自殺をしたという憶測を事実であるかのように語ったのであろう。

Coverdale は、“I determined to make proof if there were any spell that would exorcise her [Zenobia] out of the part which she seemed to be acting.” (III, 165) と述べ、Zenobia の本心を知りたがっていた。そこで、Hollingsworth に対する彼女の気持ちを探ろうと、意図的に彼を侮蔑した時に、“She had shown me [Coverdale] the true flesh and blood of her heart Zenobia loved him [Hollingsworth]!” (III, 166-67) と、彼女の彼に対する恋愛感情を確信する。Coverdale は、Zenobia に対する嫉妬心や苛立ちから、“Hollingsworth could hardly give his affections to a person capable of taking an independent stand, but only to one whom he might absorb into himself. He has certainly shown great tenderness for Priscilla.” (III, 167) と、プライドが高い Zenobia の自尊心を打ち砕くような言葉を発する。そして、その直後の Zenobia の表情について、“it was very pale;—as pale, in her rich attire, as if a shroud were round her” (III, 167) と、精神的なダメージを受け、死人のように蒼白であったと記憶している。そのため、卑屈な心理状態で発した心無い言葉が、Zenobia を深く傷つけたのかもしれないという思いを払しょくすることができずにいた。

このようにして、Zenobia への罪の意識に苛まれていた Coverdale は、彼女の死に気付く直前で、現実を認識していないような不可解な状態に陥る。彼は、Zenobia が自殺をしたかもしれないと思い、Hollingsworth のところへ向かうのだが、その直前において、“By degrees, however, the impression grew less

distinct.”や、“gray twilight made the wood obscure . . . I [Coverdale] was listless, worn-out with emotion on my own behalf . . .” (III, 228) と、平常心を保つことができない状態に陥る。意識がぼんやりとして、物憂げな表情が描かれているのは、その瞬間に、自分が彼女を自殺に追い込んだのかもしれないという不安が生じたためであろう。Rita K. Gollinは、“gray twilight”のように、辺りがぼんやりとした状況と、人物の心理状態には密接な関係があるとして、“Characters move through dim or unsteady light toward discovery of truths that evade ordinary consciousness.” (Gollin, “Dream-Work” 76) と述べている。周囲が不明瞭な状況となり、物思いに耽っているような様子であることから、Coverdaleは、自らの言動が彼女を死に至らしめたのかもしれないという強い罪悪感から現実逃避していたと推測される。

Coverdaleは、Zenobiaに対する罪の意識を感じている一方で、Westerveltという分身を心の中に登場させることで、さらなる現実逃避を行っていたのではないだろうか。実際、Coverdaleが、自分の弱さを受け入れることができずに苦悩している様子は、Westerveltとの会話においてのみ認められる。Coverdaleは、Zenobiaの葬式において、Hollingsworthに対する愛情が報われなかったために自殺をしたZenobiaを憐れむWesterveltとの会話を通して、“Your [Westervelt’s] sentiments confirm me in the idea” (III, 240) と述べている。これは、Zenobiaの死因が失恋による自殺であるということ、自分以外の人の意見を取り入れることで、読者に対してだけではなく、自分自身をも納得させようとしているためであると言える。Zenobiaの死因を、失恋の末の自殺であると思っていないCoverdaleは、彼女のプライドや自尊心を深く傷つけたことが自殺に追い込んだ原因かもしれないという思いに苛まれていたために、Westerveltに同感しているように見せかけ、自責の念から逃れようとしたと考えられる。そして、無意識にも本心を欺こうとしていたCoverdaleは、以下の引用に認められるように、罪の意識を払拭することができずに、現実逃避の夢うつ状態に陥ってしまうのである。

I [Coverdale] must have fallen asleep, and had a dream, all the circumstances of

which utterly vanished at the moment when they converged to some tragical catastrophe, and thus grew too powerful for the thin sphere of slumber that enveloped them. Staring from the ground, I found the risen moon shining upon the rugged face of the rock, and myself all in a tremble. (III, 228)

Zenobiaへの罪悪感から、Coverdaleは、彼女の自殺は自分の言動が引き金となった“catastrophe”であると思い、現実に取り戻されることになる。夢については、“dream is the unconscious expression of our inner beliefs, hopes, and fears during sleep” (Pattison 364) や、“Hawthorne represents the act of dreaming as an escape that is also an encounter—an escape from the problems of waking life only to encounter them again at a deeper level.” (Gollin, *Truth of Dreams* 215) という指摘があるように、Coverdaleは、自責の念から逃れたいという心境ゆえに、現実逃避の状態に陥ったのである。そして彼は、このような弱くて醜い自己を受け入れられず苦悩するうちに、自分を卑下するような心理状態に陥り、本心を語ることができなくなっていったのである。

2. 抑圧されたZenobiaへの愛

これまで論じてきたように、Coverdaleは、Westerveltという分身を心の中に思い浮かべることで、目の前の現実から逃れようとしていた。このような状態に陥る背景には、HollingsworthとZenobiaが互いに特別な感情を持っているということを確認し、この二人の間に、自分の入り込む余地はないと卑屈になっていたためであると思われる。Hollingsworthを目の当たりにすると、惨めな思いや屈辱的な感情に苛まれるCoverdaleは、物語の結末において、“I—I myself—was in love—with—PRISCILLA!” (III, 247) と、突然告白する。これについては、当然、さまざまな指摘がなされてきた。たとえば、“his [Coverdale’s] confession reveals a deliberate, self-conscious construction of self” (Borgstrom 381) という意見や、“his [Coverdale’s] final word, ‘Priscilla,’ is not credible as either a true confession or an illuminating revelation of

‘essential’ information” (McElroy and McDonald 2) という指摘があるだけではなく、Michael Borgstromが、“Coverdale must claim Priscilla as his true love in order to explain his bachelor status. . . . he must appear as a man with normative heterosexual desire in order to preserve his social position” (379) とも述べているように、本心を隠し通すことで、世間の冷やかな視線から身を守ろうとしていると考えられている。そのため、Coverdaleは、自分が愛していたのはZenobiaではなくPriscillaであったと告白することで、Hollingsworthに対する劣等感や、Zenobiaに相手にされなかった男であるという屈辱を、無意識に隠そうとしていたと思われる。

Coverdaleは、Westerveltのことを、“He was still young, seemingly a little under thirty, of a tall and well-developed figure, and as handsome a man as ever I beheld.” (III, 91) と、自分にとって好ましい男性像としてみているだけでなく、催眠術の能力をも兼ね備えた人物として登場させている。このことから、Coverdaleは、現実では実現不可能な願望を満たすために、Westerveltを自分の中に存在させるのである。実際、催眠術とは、“Mesmerism . . . allowed the mesmerist to control the minds of others” (Kerr and Crow 2) と説明され、Westerveltも他人の心を操る手段として用いているようである。しかし、単純に、他人の心の中を覗き込み、催眠術師の思う通りに被験者の心を操っているだけであるとは思われない。Hawthorne作品における催眠術師は、Westerveltをはじめ、*The House of the Seven Gables*のHolgraveやMatthew Mauleなど、男性登場人物の特徴の一つとして描かれており、“Hawthorne’s mesmerists . . . are men of strong intellect, ambitious” (Stoebr 49) という指摘もある。そのため、Westerveltが催眠術をかけようとする行為には、Hollingsworthへ向けられたZenobiaの気持ちをそのような手段を使ってでも振り向かせたいという、Coverdaleの男性としての欲望が隠されていると推測される。

Westerveltが催眠術をかけるVeiled Ladyは、“subject,”“clairvoyant,”“medium” (III, 5) と説明されているだけではなく、その正体がPriscillaであるというこ

とから、彼の催眠術が Zenobia の心を操ろうとする意図によるものだとすれば、Priscilla と Zenobia とは表裏一体であると考えられる。というのも、Priscilla と Zenobia は、単に、異母姉妹という間柄だけではなく、“Priscilla plays the role of Zenobia’s anti-self” (Baym 562) という意見をはじめ、“an adumbration of Zenobia’s and Priscilla’s role as the dual components of a split character” (Lefcowitz 269) や、“they [Zenobia and Priscilla] are united by a single father and so appear as two facets of the same being” (Gable 272) と、まるで 2 人は一心同体で、その人格の二面性が指摘されている。また、Veiled Lady について話をする Zenobia について、“In this story, Zenobia is actually assimilating the Veiled Lady to herself” (Baym 567) とも述べられ、“she [Priscilla] is scarcely half-alive . . . she has hardly any physique, a poet, like Mr. Miles Coverdale, may be allowed to think her spiritual!” (III, 34) と表わされた Priscilla は、Zenobia の心理の一部を投影していると解釈できる。

つまり、Westervelt が Veiled Lady (Priscilla) に催眠術をかけるのは、単に、Priscilla の心を操ろうとしているのではないのである。催眠術については、“The exercise of the mesmerist’s will in prying into this realm is not described as a matter of hot-blooded lust but of ‘cold philosophical curiosity,’ a kind of spiritual voyeurism.” (Stoehr 58) と述べられているが、Veiled Lady を通して、Zenobia の心の中を無断で覗き込むという、「許されざる罪」を犯そうとしているとも考えられる。ここでの Priscilla は、Zenobia の本心を知りたいという Coverdale の願望を満たすための “medium” として登場しているが、催眠術の被験者としてだけではなく、一人の女性として、彼から好意を持たれていたとも推測される。Coverdale によると、Priscilla が作る “silk purse” は、“symbol of Priscilla’s own mystery” (III, 35) であるということから、この “silk purse” は、Priscilla の “covert sexuality” (Lefcowitz 266) を象徴し、“Priscilla was a prostitute” (Lefcowitz 267-8) とも言われている。そのため、Coverdale は、Zenobia に対する報われない恋への憂さを晴らそうと、素直で従順な Priscilla を

利用することで、抑圧された性欲を満たそうとしていたと考えられる。

このように Coverdale は、二人の女性に対してそれぞれに恋愛感情を抱いていたが、その裏には、男としてのプライドゆえに、Zenobia のように有能な女性に対する嫉妬心も存在する。²しかし、単純に、Coverdale が意識している心理だけではなく、無意識下に抑圧された欲望が存在しているために、自分の気持ちを正直に告げることができずにいたとも推測される。Coverdale は、“Dreams had tormented me, throughout the night. . . Hollingsworth and Zenobia, standing on either side of my bed, had bent across it to exchange a kiss of passion.” (III, 153) と述べている。この夢については、Frederick Crews の、“Coverdale has unconsciously cast himself as a son” (204) という指摘もあるが、Coverdale は Zenobia に対して、母親に抱くような愛情や性的感情、つまり、Oedipus complex を無意識に抱いていたと考えられる。そのため、おとなしくて従順な Priscilla に好意を抱いていた一方で、Zenobia に対する欲望をも無意識下に抑圧していた Coverdale は、満たされることのない恋愛感情を Zenobia に、また、欲望のはけ口を Priscilla に求めていたと推測される。したがって、“The reader must not take my [Coverdale’s] own word for it” (III, 247) という前置きをした直後に、Priscilla を愛していたと告げる Coverdale の心の奥深くには、これまで抑圧していた Zenobia に対する愛の告白を屈折した形で行ったと推測され、ここでカタルシスを得るに至ったのであろう。

結 論

以上のように、Coverdale の語りは、現実逃避と自己保身で成り立っており、読者を欺いていたことは明らかである。自らが思い描くような人間になれず、卑屈になっていた Coverdale は、本心を悟られることのないように、巧妙な方法で事実や心情を語っていたのである。そのため、一方的に恋心を募らせながら、心の奥深くに秘めていた Zenobia への愛を、終始表現していたこの物語は、Coverdale の彼女への思いが綴られたラブレターのようでもある。

Hollingsworthへの嫉妬心や劣等感に苛まれていた Coverdale は、物語の結末において、それまで心に秘めていた Zenobia への恋心を打ち明けたことで、これまでの卑屈な精神状態から解放されたと解釈できる。Coverdale の最後の突然の告白は、単に、Zenobia への愛を暗示しただけではなく、それまでの報われないう恋愛に区切りをつけ、新たな気持ちで今後の人生を歩んでゆくための通過儀礼のようなものであったのである。

Works Cited

- Baym, Nina. "The Blithedale Romance: A Radical Reading." *Journal of English and Germanic Philology* 67 (1968): 545-69.
- Borgstrom, Michael. "Hating Miles Coverdale." *ESQ* 56 (2010): 363-90.
- Crews, Frederick C. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*. NY: Oxford University Press, 1966.
- Gable, Harvey L. "Inappetible Longings: Hawthorne, Romance, and the Disintegration of Coverdale's Self in *The Blithedale Romance*." *New England Quarterly* 67 (1994): 257-78.
- Gollin, Rita K. "'Dream-Work' in *The Blithedale Romance*." *ESQ* 19 (1973): 74-83.
- . *Nathaniel Hawthorne and the Truth of Dreams*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1979.
- Griffith, Kelley. "Form in *The Blithedale Romance*." *American Literature* 40 (1968): 15-26.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, Roy Harvey Pearce and Claude M. Simpson. Volume III. *The Blithedale Romance and Fanshawe*. 1964.
- Kerr, Howard and Charles L. Crow, eds. *The Occult in America: New Historical Perspectives*. Urbana: University of Illinois Press, 1983.
- Kupsch, Kenneth. "The Modern Tragedy of Blithedale." *Studies in the Novel* 36 (2004): 1-20.
- Lefcowitz, Allan and Barbara. "Some Rents in the Veil: New Light on Priscilla and Zenobia in *The Blithedale Romance*." *Nineteenth-Century Fiction* 21 (1966): 263-75.

McElroy, John Harmon and Edward L. McDonald. “The Coverdale Romance.” *Studies in the Novel* 14 (1982): 1-16.

Pattison, Joseph C. “Point of View in Hawthorne.” *PMLA* 82 (1967): 363-69.

Stoehr, Taylor. *Hawthorne’s Mad Scientists: Pseudoscience and Social Science in Nineteenth-Century Life and Letters*. Hamden: Archon Books, 1978.

フロイト, S. 『フロイト著作集 第一巻』 懸田克躬／高橋義孝訳 京都：人文書院, 1971.

---. 『フロイト著作集 第二巻』 高橋義孝訳 京都：人文書院, 1968.

マナスター, G. J. / コルシーニ, R. J. 共著 『現代アドラー心理学 上』 高尾利数／前田憲一訳 東京：春秋社, 1982.

注

- 1 たとえば, “he [Coverdale] lost control of himself and killed her [Zenobia]” (McElroy and McDonald 9) と、Zenobiaの高慢な態度に耐えかねたCoverdaleが衝動的に殺害したという意見や, “Coverdale may have in fact murdered Zenobia for the purpose of assuaging some presumed sexual frustration with her” (Kupsch 2) と、彼女に対する欲望を抑えきれずにいたことが、彼女を死に至らしめた原因であるという指摘がある。
- 2 Coverdaleは, “Her [woman’s] place is at man’s side.” (III, 122) と主張するHollingsworthに対して, “Hollingsworth had boldly uttered what he, and millions of despots like him, really felt.” (III, 123) と述べているように、女性は男性と対等な立場ではなく、男性のそばに寄り添うべきであると考えていた。そのため、Zenobiaに惹かれていたにもかかわらず、男性と対等な立場を主張する彼女の考えを正面から受け入れることができずにいたと思われる。